

『新興大国インドの行動原理』（慶應義塾大学出版会、2020年）

伊藤 融(防衛大学校)

## 1. 「理解できない国」としてのインド

2020年10月6日日米豪印外相会談

2020年9月10日上海協力機構外相会談、印中外相会談

「インドは同盟システムに加わらない」（ジャイシャンカール外相）

「インド太平洋」は特定の国を標的としない、「自由で開かれた包摂的な(inclusive)地域」、

「インドの「戦略的自律性」は不変」（モディ首相）

## 2. 台頭するインド

「世界最大の民主主義国」 有権者数9億人(2019年総選挙)

英仏に匹敵するGDP

ロシア並みの軍事費

## 3. インド外交のDNA

### (1) 強い大国志向

南アジア～圧倒的なパワー、「地域超大国」

近年の中国の影響力浸透→「巻き返し」の必要性

世界～冷戦期の限定的なハードパワー

→「理念」の外交 ex. 非同盟運動

冷戦後のハードパワー増大→「世界大国」へ向けた外交

### (2) 自主独立外交へのこだわり

「同盟」を忌避、「ジュニア・パートナー」の否定

冷戦期の「非同盟」 ※ソ連との平和友好協力条約の反省

冷戦後の「戦略的パートナーシップ」

すべての大国、新興国と緊密な関係

友好国以上同盟国未満の関係、「戦略的自律性」は維持

### (3) 「アルタ的リアリズム」の伝統

「プラグマティズム」としての「リアリズム」

カウティリヤ『アルタシャーストラ(実利論)』

・徹底したアルタ＝国益追求の正当化

・「弱肉強食」としての「国際社会」

- ・「隣接国」は本質的に「敵対者」
  - ・永遠の「友邦」は存在しない
- 「アルタシャーストラ」の対外政策  
 パワーの慎重な計算に基づく「6計」  
 和平・戦争・休止・進軍・庇護要請・二重政策

#### 4. 外交政策を制約する構造

##### (1) 脆弱な国民国家

西洋理念型とは異質のインド

～きわめて多様・多元的で、国境横断的なエスニック集団、宗教集団の結びつきも無数

↓

未完成の「国民国家」をできる限り理念型に近づけ、悪くともその分裂や崩壊を回避するための外交政策

ex.)スリランカ内戦、東パキスタン独立問題への対応

- ・「国内」のタミル人、ベンガル人の反応とそれへの配慮
- ・インド各地の分離運動に正当性を与えることへの懸念

##### (2) 弱い連邦政府

連邦における一党優位制の崩壊(1990年代以降)

↓

地域政党の影響増大

ex.)タミル・ナードゥ州の DMK と AIADMK

LTTE 掃討作戦に関してのスリランカ政府への「圧力」要請

国連人権理事会でのスリランカ非難決議「賛成」票要請

西ベンガル州の草の根会議派

ティースタ川共同利用協定への反対

↓

近隣外交における「連繫政治」の展開

→中国の影響力浸透に対抗するための国家戦略の障壁

##### (3) 域外修正主義と域内現状維持の力学

パワーの格差に基づく選択

ex.)非同盟運動、NPT 拒否、WTO や UNFCCC での異論

カシミール問題、SAARC への消極的姿勢

↓

インドの「庭」としての近隣=「域内」への中国の影響力拡大にどう対処・対抗するか?

→現在の「インド太平洋」における日米豪印連携

「近隣第一政策」で周辺国に接近

自前の軍事力増強

## 5. 主要国との戦略的パートナーシップ

冷戦期と冷戦後のインドの対外関係

疎遠なインド → 戦略的パートナーシップ

### (1) 印米接近の要因と限界

なぜ接近するか?

- ・民主主義国同士の「自然な同盟」  
～「民主主義同盟/連合」(ポンペオ国務長官)
- ・インド市場の潜在力(米「基幹産業」としての兵器、原子力を含む)
- ・インドにとって最大の輸出相手国、主要投資国
- ・中国に対する「共有された」懸念

印米間の埋めがたい溝

- ・「非同盟」に立脚したインドの伝統的外交と米国の単独行動主義/他国への介入  
イラク戦争、イラン核問題、リビア情勢 etc
- ・新興国としてのインドと先進国の米国  
気候変動問題、WTOドーハラウンド交渉 etc

### (2) 印中の対立要因と協調要因

中国の何を警戒するか?

- ・インドの対中脅威認識  
中国は正規戦では最大の脅威  
未解決の国境問題 → 継続する国境交渉と度重なる緊張  
2017年 ドクラム危機  
2020年 実効支配線(LAC)での衝突 → 45年ぶりの犠牲者

それでも必要な中国への関与

- ・隣接する台頭する市場の重要性
- ・経済的な多国間レジーム形成
- ・国連気候変動枠組条約締約国会議  
WTOドーハラウンド自由化交渉  
公正な経済秩序の構築やドル中心の国際通貨秩序見直し
- ・多極世界の実現、国家主権尊重

(3) 印中の「時の試練を経た」関係の要因

- ・兵器分野でのインドの対中依存／最大の顧客としてのインド
  - ミグ戦闘機をはじめとした旧ソ連に由来する兵器体系
  - ロシアの退役空母ゴルシコフの導入
  - ブラーモス・ミサイル、第5世代戦闘機など共同の研究開発、生産に向けた動き
- ・原子力協力
  - 古くからのパートナー
  - インド側の濃縮・再処理の権利、および燃料の安定供給をふくむ協定
- ・インドの政治大国化を強く支持するロシア
- ・単独行動主義や一極支配への反対、国家主権尊重
- ・隣接する中国への懸念
- ・パキスタン政策でのインドの立場支持

インドからみた米中印の関係イメージ

問題領域	アメリカ	中国	ロシア
国内政治的価値(民主主義、多様性)	○	×	△
国際政治秩序(多極世界、主権尊重)	×	○	○
国際経済秩序(WTO、気候変動問題等)	×	○	△
政治大国化(国連安保理常任理事国、NSG入り等)	○	×	◎
地域外交・安保(カシミール、アフバク、中国等)	○	×	◎
軍事協力(兵器輸入・開発、本格的な合同演習)	○	×	○
貿易・投資	◎	○	×
エネルギー・資源	○	×	○

記号注:

◎親和性・協力関係がとくに強い ○基本的に親和性・協力関係が強い

△どちらともいえない ×基本的に疎遠ないし競争・対立関係が強い

プラグマティックな政策としての「全方位型戦略的パートナーシップ」

6. 日印関係の限界と可能性

(1) 対中認識の温度差

- ①新興国のインドと先進国の日本～印米関係と同様の問題
- ②「非同盟」／「戦略的自律性」重視のインドと対米同盟を基軸とする日本
  - ～有事の際には独力で対処することが前提のインド→慎重な対応の必要性
- ③直面する脅威の現場
  - 日本～尖閣・東シナ海、(南シナ海)
  - インド～陸の実効支配線(LAC)、インド洋、(南シナ海)
  - ただし、習近平体制下の中国の攻勢によって、海洋では脅威認識の収斂も
  - ～南シナ海、インド洋の北半分

(2) 軍事協力の制約

- 日本の憲法・法制度上の限界
- インド・ロシアの密接な軍事協力

(3) インド内外の連結性インフラ開発支援

- ・「南北輸送回廊」～イラン・チャーバーハール港、アフガン、中央アジア、ロシア  
→中パ経済回廊(CPEC)へ対抗
- ・インド北東部のインフラ整備  
→インドと ASEAN の連結性向上
- ・「アジア・アフリカ成長回廊(AAGC)」

(4) 「債務の罠」問題への対応

- スリランカ・ハンバントタ港の教訓

(5) インド近隣国の民主化・安定化に向けた協力

- ←日本はどの国とも良好な関係